

みなさん、こんにちは。暑い暑い8月も半ばとなりました。いつかのテラス新聞で、今年は毎月勉強会に参加する！と宣言してしまったので、しっかりと毎月自分が惹かれた勉強会に参加しています。8月5日に川越市の埼玉医科大学総合医療センターで開かれた『第10回地域緩和ケア講演会(PINKの会)』についてご紹介します。講演者は、東京芸大大学院の中澤希公さんで、医療ではなく「アート」からケアに関わっている素敵な女性でした。中学生の頃にお母様を乳がんで亡くされ、「グリーフ」と向き合いながらクリエイティブな活動を継続されています。「悲しみ」というひとことでまとめられる気持ちも、その人によって「後悔」「反省」「懺悔」などが入り交じり、言葉では表現できないつらさであるということ。希公さんの作る作品は、あえて余白を残し、鑑賞した人がその人なりの気持ちを投影できるようになっているのかな、と感じました。私は、関わりたい！と思う人を見つけるとすぐに話しかけてしまうのですが、会の最後に希公さんと少しだけお話する時間をとることができて、ますます希公さんの展示を観に行きたくなりました。司会の儀賀先生が、「さようならをするにしてもしないにしても、まずはこんにちはから」とおっしゃっていて、本当にその言葉の通りだなと思いました。どんなつらさでも、向き合うことはとてもエネルギーがいることで、つらさと「こんにちは」をすることがスタートなのだけど、そのドアを開けることって本当に難しい。人間だから。大人も子供も。そんなふわっとした思いしか書けませんが、私の心が動く勉強会でした。ではみなさま、残暑も乗り切りましょう。（※上記写真は中澤希公さんの許可を得て掲載しています。）



緩和ケア・テラス新聞⑭

埼玉協同病院東5病棟

2026年8月号

緩和ケア私の仕事

「病棟と病棟をつなぐ橋渡し」 看護師 三浦 康子

こんにちは、東5病棟看護師の三浦です。私の普段は東5病棟で、緩和ケアが必要な患者さん、ご家族に対して、緩和ケア病棟のスタッフと共に、昼夜問わず（夜勤も頑張っております!）「その人らしく」を念頭に、QOLが高められるケアを行っています。そして毎週木曜日になると、少し違う顔になります。緩和ケア



チームのメンバーとして、医師や薬剤師、作業療法士、病棟看護師、相談員の皆さんと一緒に院内の病棟を回診しています。緩和ケアチームが関わる患者さんには、痛みや息苦しさ、吐き気などの症状に困っている方、これからの治療や療養場所について悩んでいる方、そして緩和ケア病棟への入院を待っている方もいます。緩和ケア病棟への入院を希望されていても、すぐに病棟へ移れるとは限りません。そんな時には、まず緩和ケアチームが一般病棟のスタッフと一緒に、症状を少しでも楽にできる方法を考えます。私は、緩和ケア病棟で患者さんを迎える前から関わり、その後病棟へつないでいく、いわば「橋渡し」のような役割なのかなと思っています。回診で各病棟へ何うようになって感じるの、緩和ケアは緩和ケア病棟だけにあるものではない、ということです。患者さんの苦痛を少しでも減らそうと、体位を工夫したり、薬の使い方を相談したり、ご家族へ声をかけたり。忙しい業務の中でも患者さんの希望を何とか叶えようとする各病棟スタッフの姿に出会います。「ここにもたくさんの緩和ケアがある」と驚いたり、なるほど!と勉強させてもらったりすることも少なくありません。緩和ケア病棟で働いている私が、他の病棟へ緩和ケアを届けに行っているつもりが、実は私の方がたくさんの「緩和ケア」を持ち帰っているのかもしれません。木曜日の回診を終えて東5階へ戻る頃には、毎回ちょっとだけ看護の引き出しが増えています。これからも病棟と病棟、人と人をつなぎながら、患者さんが少しでも穏やかに過ごせる方法を、皆さんと一緒に考えていけたらと思っています。

埼玉協同病院東5階緩和ケア病棟のホームページは

こちらからもご覧になれます。



今後のイベント予定

7～8月 テラス新聞コンテスト 9月秋桜コンサート